斉藤延喜先生への賛歌
――「眼」は何を見ているのか?

臼　井　雅　美

斉藤延喜先生は、１８世紀から２０世紀に至るまでのイギリスやアイルランドの作家を主として研究されてこられた。そして、どの作品を論じられる時にも、常にテキスト重視という姿勢を崩さない研究をされてきた。

文学を研究する者にとって、まずはテキストをきちんと読むことは当然のことではあるが、この第一歩が非常に難しいことも事実である。特に、文学批評の研究書が次々に出版され、ネット上で様々な情報が拡散する現代において、真摯な態度でテキストに取り組むことがより困難になってきている。このような時代に、斉藤先生が掲げられてきたテキスト第一主義は、もう一度見直されるべきであると思われる。

近現代小説をご専門とされていた斉藤先生は、ローレンス・スターンからジェイムズ・ジョイスまで、またオスカー・ワイルドからサミュエル・ベケットまで、さらにサミュエル・ジョンソンからシャーロット・ブロンテ、そしてラフカディオ・ハーンに至るまで、ジャンルを超えて１８世紀から２０世紀にかけて非常に幅広く多くの作家のご研究をされてこられた。

そこには、アイルランド文学やアイルランド系作家のご研究が一つの軸に、また１８世紀から２０世紀初頭の社会を背景とするイギリス文学と文学批評が二つ目の軸にあり、さらにそれらを融合するかたちで世紀末にヨーロッパからアメリカへ、そして最終的に日本に辿り着いたハーンの研究が三つ目の軸にあると言える。

研究者として歩み始められた頃から、斉藤先生はジョイスの研究に取り組まれており、ジョイスの難解な作品を読み解くことにより、テキストが持つ魔力と、それがアイデンティティの構築へとつながることに取りつかれたのではないか。そして、そのテーマが、ベケットへ、そしてハーンへと受け継がれていく。

それらのご研究の中で、斉藤先生は特に「眼」をめぐる幻想光学をテーマとされてきている。この「眼」というテーマでは、ハーンとC.ブロンテの『ジェーン・エア』に関して先生は論じられているが、その中でもハーンと「眼」は、身体的眼に関わる「眼のドラマの主要な要素」を含み、かつその致命的欠陥がハーンの「非・視の特異性」を生み出し、それがハーンの世界観や文学感の原点であるという論考には、斉藤先生の文学研究への思いが込められている。

『同志社大学英語英文学研究』８５号、８８号、および９７号に掲載されたハーンと幻想光学に関する３編の論文は、斉藤先生のハーン研究の集大成である。これらの論文は、越境する文学や世界観への評価に移行している２１世紀における、ハーン論再考であると言える。

これらの論文の中で、斉藤先生は、身体的「眼」のハンディに苦しんだハーンは、日本をどの様に「見た」のかということを、追及されている。その議論の中で、ハーンの眼科医が下した身体的健常者による診断と同時に健常視が持つ限界にいどむ非視の可能性を追求した点が述べられている。さらに、それは、西田幾多郎らの京都学派による世界的見地からの哲学の中で論じられたハーン論へと継続される。それは、「近代の超克者」としての西田とハーンの出会いであり、同時に西田とハーンがそれぞれ「神国日本」と「東亜共栄圏」の幻想から目覚め、私たちもその幻想から目覚めるべきであるという議論である。即ち、近代を超克することは、人間の身体的眼の外側に出て、その眼を経由せずに、表象されるものの背後に存在する世界を見ることであると斉藤先生は結論づけられている。それは、「幻想光学の圏外に脱出する

こと」であり、極めて困難を伴う企てでありながらも、ハーンの企てを探る学期的な議論である。

ハーンは、左目を１６歳の時に失明しており、強度の近眼という視覚的ハンディに苦しんだだけでなく、それによって角膜が白濁し醜く変形した容姿にも強いコンプレックスを抱いていた。彼は、左側の顔をさらけ出すことを極力嫌い、写真も正面を向いて撮られることを拒否したという。ハーンの現存する肖像写真は、右向きのポートレイトであることを考えると、ハーンがいかに自らの眼を恨み、嫌い、そして拒否したかが理解できる。

さらに、ハーンは、ギリシャ人の母とアイルランド生まれの軍人の父との間に生まれ、両親から見放されて孤児となり、イギリスからアメリカへ、アメリカ南部からカリブ海の西インド諸島へと渡り、最終的に日本へたどり着いた異端児である。ハーンのクレオール性は、国家、民族、文化、宗教などのボーダーに対立するものであり、偏見と差別との闘いを生んだ。それは、同時に、ハーンが近代化する西欧社会から締め出され、国家、民族、家族という枠組みからもはみだしたことでもあった。

ハーンの西欧近代からの「自己追放」は、新たな道、即ち「非西欧の暗闇」である「方法としてのアジア」との遭遇を可能とした。しかし、そこには、実際に眼で見たアジアと「幻想としてのアジア」との葛藤があり、ハーンの「神国日本」との対峙はハーンの病んだ眼にとって文学的あるいは哲学的想像力をかきたてた。

しかし、ハーンの失われた眼は、失われた自我であり、また近代西欧において失われた世界観でもあった。

小泉八雲として日本精神を日本人よりも理解したと通俗的に知られているハーン像の裏には、クレオールであり、漂流者であり、反抗者であり、また近代西欧の終わりの証人でもあった流動的で超越したハーンがいたのだ。

斉藤先生のハーンに関する幻想光学論は、ハーンが、国境、民族、宗教、文化というボーダーを超えて生き続け、新たなアイデンティティを構築した

ことを再評価するものであると思われる。帰属する社会を持たず、立ちはだかる様々な壁を乗り越えて、最後に日本に帰化しながらも日本国民にはなれなかったハーンには、彼独自の人生哲学が構築されていったのである。

そこには、２１世紀に生きる私たちが直面している難民、放浪、亡命、別離、壁、移住、孤独という世界が、すでに広がっていたのだ。ハーンは、文化的難民であり、時代を超えてその精神性は評価されるものである。斉藤先生のハーン研究は、私たちの激動する現代社会との対峙の中で、生きることへのメッセージが込められているように思われる。